

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380741

研究課題名(和文) 発達障害児の家族の支援システム構築に向けた生活実態解明に関する研究

研究課題名(英文) Problems in Daily Life Faced by Families of Children with Developmental Disorders

## 研究代表者

山下 亜紀子 (Yamashita, Akiko)

九州大学・人間・環境学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：40442438

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、発達障害児の家族の生活実態を学際的視点から明らかにすることを目的として実施し、特に母親の分析を中心に行った。第1に生活困難分析から、養育に関わる専門的支援体制の不備、身近な社会関係における支援の脆弱性、母親自身の生活困難の伏在化の3点が明らかになった。第2にソーシャル・サポート分析から、サポート源の少なさ、サポート内容の限定性、母親がサポートを受けていないことなどが示された。第3に社会参与の分析から、母親1人が子育ての責任を抱え孤立する問題、生活困難の多くが子どもの通う学校、幼稚園、保育園との関わりで生み出されているという問題が明らかになった。

研究成果の概要(英文)： This study aims to identify problems in the daily lives of mothers of children with developmental disorders. Our findings suggested that three problems need to be solved: insufficiency in the services of specialized agencies, vulnerability of social support by surrounding people, and the latency of the mother's problems.

研究分野：社会学

キーワード：家族福祉 育児支援 発達障害児

1. 研究開始当初の背景

近年、家族の存在を所与とする障害児支援システム、障害児教育システムを問題視する研究がみられるようになり、障害児家族そのものを支援する重要性がようやく認識されるようになってきた。

中でも発達障害児の家族支援は喫緊の課題である。発達障害児は小・中学校の通常学級に一定程度在籍している可能性が報告されており、当事者や家族への社会的支援の必要性が認知されつつある。また2004年に公布された「発達障害者支援法」でも家族支援の努力義務が記されており、その必要性は法律上でも明確に規定されている。しかし公的領域における支援は未だ不十分であり、さらに子どもに生じる問題が養育や躰の問題として転嫁されるなど、発達障害児の家族には独自の育児困難感があることを指摘した研究も多い。

以上の研究動向や社会的実態をふまえると、発達障害児の家族の生活実態を明らかにし、支援方策を検討していくことは急務の課題と思われた。

発達障害児の家族の生活実態にアプローチした研究は、国内、海外ともに障害の受容過程やストレス論など認知や意識に関する研究が先行してきた。家族の支援方策を検討していくためには、心的側面に加え、より包括的視点から生活問題をとらえる必要がある。また生活問題にとどまらず、ソーシャル・サポートや専門サービス利用状況など、いわゆる支援環境も明らかにする必要があると思われる。しかしこれらの研究蓄積はあまりなく、加えて、生活問題と支援環境をあわせて検討し家族の生活実態を俯瞰的にとらえようとする研究は皆無であった。さらに障害児家族研究は、いずれも個別領域での検討にとどまっていたが、障害児の親の問題は多様であることが想定され、複眼的視点にたった学際的研究の推進を図る必要があると考えられた。

2. 研究の目的

本研究では、上記のような背景をふまえ、支援システム構築に資する検討資料として、発達障害児の家族の生活実態を学際的視点から包括的に明らかにすることを目的として実施した。第1の課題は、生活問題の解明であり、発達障害児家族を対象として実施する定性的調査、定量的調査から問題の包括的把握と類型化をめざすこととした。第2の課題は、支援環境の実態の解明であり、専門サービスの提供実態、専門サービスの利用実態、ソーシャル・サポートの実態について、家族を対象とする定性的調査、定量的データの分析により明らかにすることを設定した。

さらにこれらの課題はいずれも社会学と精神医学の学際的分析からアプローチする

こととした。

3. 研究の方法

平成25年度は、第1に発達障害児の母親の生活困難について検討することとし、これまで実施してきたグループインタビュー調査データを活用した分析とまとめを行った。第2に支援環境の分析として母親のソーシャル・サポートの実態を検証することとし、上記と同じくこれまで実施したグループインタビュー調査データを活用した分析とまとめを行った。第3に同じく支援環境の分析として、家族支援先進国であるイギリスにおける調査の実施と分析を行った。

平成26年度は、第1に、家族支援先進国であるイギリスにおいて実施した調査の分析とまとめを行った。第2に、前年度までの研究から、既に支援環境の脆弱性が明らかになっており、さらに支援環境の問題が生活困難を生じさせている要因となっていることが推定されたため、2つの研究課題に対して複合的にアプローチする調査と分析を実施した。

平成27年度は、生活困難、支援環境について発達障害児の母親を対象とする定量的調査の実施、分析を行い、さらに3年間を通じた研究の総括と報告を行った。

4. 研究成果

(1) 家族の生活問題の解明

まず母親の生活困難について質的分析から明らかにした。この分析では生活上の問題として、<障害児の言動による生活の混乱>、<子育てモデルがなく、試行錯誤している状況>、<支援環境との物理的・心理的距離感>、<良好ではない周囲との関係性>、<日常的に生じる心理的負担感や葛藤>の5つの概念的カテゴリーを導き出し、また問題間の相互の関連性について下記のように概念モデル化を試みた。

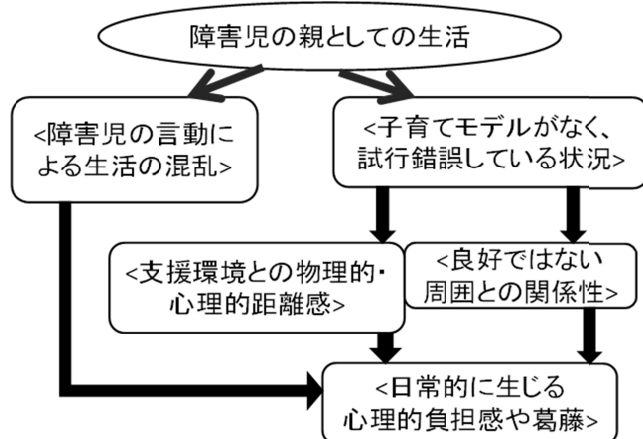


図1 概念モデル化: 生活困難における相互の関係性

この分析をもとに今後、解決を要する問題点として、第1に養育に関わる専門的支援体

制の不備、第2に身近な社会関係におけるソーシャルサポートの脆弱性、第3に母親自身の生活困難の伏在化の3点をあげた。

次に母親の生活困難に関する量的調査の分析からもケア役割が母親に不均等に配分されている実態、また子育てについて責められたことの経験比率が高く、子どもが過ごす学校社会との接点や身近な関係性でこうした問題が生じていることを明らかにした。

## (2) 家族の支援環境の実態の解明

まず母親のソーシャルサポートの実態として以下の4点を明らかにした。第1にサポート源そのものが少ないこと、第2にサポートの内容は社会情緒的なものが中心であること、第3に道具的サポート、情動的サポートについては、提供されていたとしても、制度的支援に基づくものが多いこと、そして第4に、最も大きな問題として、ソーシャルサポートを受けている母親が少ないことである。さらに制度的支援に加え、対人的支援からも欠落した問題状況を打開するべく「ケアのケアの社会化」を積極的に進める必要性を示した。下記の表は、探索的分析から見出されたソーシャルサポートの種類と具体的内容である。

サポート源	種類	具体的内容
家族	夫	社会情緒的 話を聞いてくれる
	子どものきょうだい	道具的 ・暴力をとめてくれる ・障害児を助けてくれる
		社会情緒的 ・自分の大変さを理解してくれる ・障害児のことを理解してくれる ・将来のことを一緒に考えてくれる
	自分の親	道具的 ・学校や保育園、幼稚園への送り迎えをしてくれる ・子どもたちの面倒をみてくれる
		社会情緒的 ・精神的な支えとなってくれる
	夫の親	道具的 ・学校や保育園、幼稚園への送り迎えをしてくれる
	その他の家族(自分の実家・姉)	道具的 ・子どもたちの面倒をみてくれる
社会情緒的 ・精神的な支えとなってくれる		
インフォーマルな関係性	友人	社会情緒的 話を聞いてくれる
	職場の人	社会情緒的 子どものことを気にかけてくれる
	学校の保護者	社会情緒的 話を聞いてくれる 心強い気持ちにさせてくれる 子どものことを気にかけてくれる
		道具的 子どもの遊ぶ場所、居場所を提供してくれる 暴力をとめてくれる
	親の会の仲間	情動的 ・教育機関、医療機関、専門機関についてアドバイスをしてくれる ・教育機関、医療機関、専門機関について情報を教えてくれる
		社会情緒的 話を聞いてくれる 励ましてくれる 気持ちをわかってくれる (共感してもらえる、一人ではないと思える) 感情をだすことができる(涙を流せるなど)
		社会情緒的 話を聞いてくれる
専門機関	学校の先生	道具的 ・大変な状況と一緒に対応してくれる いるいることができるように子どもに指導してくれる
		社会情緒的 話を聞いてくれる 障害について理解してくれる 自分の大変さを理解してくれる
	医師	道具的 学校に介入してくれる
		情動的 子どもの対応の仕方についてアドバイスをしてくれる
		社会情緒的 優しく対応してくれる
	専門機関の人	道具的 学校に介入してくれる いるいることができるように子どもに指導してくれる
		情動的 進路先、就職先についてアドバイスをしてくれる 療育について教えてくれる
社会情緒的 精神的な支えとなってくれる 子どもと信頼関係を結んでくれる。		
その他	情動的 育児に関わり、夫婦関係についてアドバイスをしてくれる	
	社会情緒的 話を聞いてくれる	

次に、ソーシャル・サポートに関する量的調査からは、社会情緒的サポートに関しては、サポートを得ていることが示されたが、他のサポート内容については調査項目に含むことができなかったため今後の課題とした。

さらに家族支援の先進国であるイギリスにおいて実施した調査からは、ケアラーとしての家族を重層的に支える仕組みがあること、しかし一方で支援が整備されているにも関わらずケアラーの困難さがあり、家族のケア責任を所与とする仕組みの問題などを指摘した。

## (3) 家族の生活問題・支援環境についての複合的調査

森岡清志(1984)の論考を参考に、支援環境を専門機関群、相互扶助的提供主体群の2つからなる社会財とし、これら社会財との関わりで生み出される生活困難について、半構造化インタビューのデータより分析を行った。その結果、第1に社会参与のプロセスで生じる生活困難の内容として、母親1人が子育ての責任を抱えこみ孤立しているという問題、第2に社会参与のプロセスで生じる生活困難の多くが子どもの通う学校、幼稚園、保育園との関わりで生み出されているという問題が明らかになった。そしてこの分析結果から乗り越えるべき課題として、第1に母親をケアラーとして当然視するジェンダー構造の打破、第2に発達障害児の教育のあり方の改革をあげた。

## <引用文献>

森岡清志、都市的生活構造、現代社会学、18号、1984、78-102.

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 〔雑誌論文〕(計7件)

山下亜紀子、発達障害児の母親の生活実態に関する研究 自記式質問紙調査をもとに、人間科学・共生社会学、査読無、7号、2016(掲載予定)

山下亜紀子、発達障害児の母親が抱える生活困難と社会参与についての研究、社会分析、査読有、42号、2015、5-23

根来秀樹、精神科治療における処方ガイドブック 注意欠如・多動性障害、精神科治療学、30巻、査読無、2015、17-21

山下亜紀子、発達障害児の母親の対人的

支援についての考察 - ソーシャル・サポート分析に基づいて -、西日本社会学会年報、査読有、12号、2014、5-19

根来秀樹、大西貴子、. 鑑別をめぐる問題 ASD と ADHD の鑑別と併存、小児科診療、査読無、41号、2014、4、1785-1769

山下亜紀子、河野次郎、発達障害児の母親が抱える生活困難についての研究、日本社会精神医学会雑誌、査読有、22巻3号、2013、241-54

根来秀樹、発達障害なのに、統合失調症と誤診されているケースがある、精神看護、査読無、17号、2014、46-48

〔学会発表〕(計6件)

山下亜紀子、河野次郎、イギリスにおけるケアラー支援の実態、西日本社会学会第72回大会、2014年5月11日、西南学院大学(福岡県福岡市)

根来秀樹、会長企画シンポジウム1:日本の治験データからみた各薬剤の意義 成人 ADHD 治験データからみたアトモキセチンと徐放性メチルフェニデートの意義、第110回日本精神神経学会学術総会(招待講演)、2014年6月26日、パシフィコ横浜(神奈川県横浜市)

根来秀樹、薬物療法に関する検討委員会セミナー「児童青年期精神科における薬物療法の実際」「児童青年期患者における抗ADHD薬の使用とその留意点」、第55回日本児童青年精神医学会総会(招待講演)、2014年10月12日、アクトシティ浜松(静岡県浜松市)

山下亜紀子、発達障害児の母親の生活困難とソーシャルサポート(シンポジウム「福祉社会学の現在 - 福祉的行為の分析」)、西日本社会学会第71回大会、2013年5月12日、琉球大学(沖縄県那覇市)

根来秀樹、シンポジウム「ADHDの理解と支援について」学校・園におけるADHDがある子ども達への支援 - 児童精神科医の立場から -、第54回日本児童青年精神医学会総会(招待講演)、2013年10月11日、札幌コンベンションセンター(北海道札幌市)

根来秀樹、発達障害の理解と支援、第20回日本精神科看護技術集会 専門(招待講演)、2013年8月31日、前橋市民文

化会館(群馬県前橋市)

〔図書〕(計2件)

根来秀樹他61名、キーワードブック特別支援教育 - インクルーシブ教育時代の障害児教育、2015、300

根来秀樹他8名、ADHDの子どもたち、2014、156

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山下 亜紀子 (YAMASHITA, Akiko)  
九州大学・人間環境学研究院・准教授  
研究者番号: 0442438

(2) 研究分担者

根来 秀樹 (NEGORO, Hideki)  
奈良教育大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号: 80336867

(3) 研究協力者

河野 次郎 (KAWANO, Jiro)  
宮崎県立宮崎病院精神医療センター・医長